

窓

大学のスポーツ

法学部長

森 島 昭 夫



スポーツには、競うスポーツと楽しむスポーツとがある。スポーツを観て楽しむのも後者の一類型と言えそうだが、ここでは、自分で体を動かすスポーツだけを考えることにする。

大学では、競うスポーツと楽しむスポーツが併存している。かつて日本が貧しかった時代には、大学が貧弱なスポーツ施設しか持っていないこともあって、大学のスポーツは競うスポーツが優勢であり、運動部に入っていなければ、体育館もテニス・コートも利用できなかった。現在はこのような状態は解消されているのであろう。

私は、教養学部時代は時間のほぼすべてを競うスポーツに費やした。高校ではボートをやっていたので、大学では変ったことをやりたいと思って空手部に入ったが、どうも格闘技に馴染めないと感じていたところに高校時代の経験を買われてボート部にも誘われたので、ボート部か空手部の合宿所で過ごすことが多かった。

両方の部とも、本業のほかに、腕立て伏せ、腹筋運動、兎跳びなど毎日何十回何百回とやらされた。そのお陰で、三十年以上も経った今でもこの時代に培った基礎体力を食い潰して多忙な毎日を凌いでいる。しかし驚いたことに、当時良いとされていたことのほとんどが現在のスポーツ医学では害があるとされている。足を伸ばしたまま腹筋運動をすると腰を痛めるとか、兎跳びもどこかに悪いと言われているようである。食糧不足の時代に試合直前だけ食べさせてもらった筋だらけの豚カツは、今ではエネルギーが出ないとして含水炭素食品にとって代わられているようである。名大

保体センターの生みの親の松井秀治先生が若い頃精神主義で学生の私達を鍛えられたことを考えると、スポーツ医学の「進歩」も大したものだと思う反面、やらされたわれわれはいい面の皮だと思わずにはいられない。

現在私は名大ボート部の部長をしているが、名大ボート部が競うスポーツをしているのか楽しむスポーツをしているのか、疑問に思うことが少なくない。部員諸君に根性がないということ（だけ？）を言っているのではない。競うために不可欠なエイトの最新艇は、五年も前の木造艇であり、全国大会ではグラス・ファイバー艇でない艇を見るのが難しいという御時世に、大変な骨董品である。合宿所も、新人が今どきドヤ街でも見かけないオンボロ・プレハブに、寝泊りしている有様である。まともなコーチもいない。七大戦にボート競技がないのは幸いだが、他の運動部は、七大戦に勝てと言われて、競うための環境が用意されているのだろうか。現代スポーツで勝つためには、根性だけでは間に合わないことは大学当局も十二分にご存知のはずである。オリンピック選手だけに莫大な金をかけてみても、底辺に広く厚い層がなければ、競うスポーツの水準をあげることが出来るわけではない。名大の競うスポーツの水準が仮にそれほど高くないとしても、「糞土の牆は朽（ぬ）るべからず」という孔子の教えに従っておらずに、大いに金をかけてレベル・アップすべきである。

ところで、私は不惑の齡などとっくの昔に超えてしまったが、今もって楽しむスポーツの選択に迷っている。幸い保体センターは、職員のためにテニスやゴルフの早朝講習を開いて下さっており、報酬もなしに付き合ったださる講師の先生方には心から感謝しているが、講習のないときには多忙にかまけてなかなか習ったことを実践するインセンティブがない。勝手なことをお願いして恐縮だが、もはや競うスポーツを望めなくなったわれわれのために、現代スポーツ医学の眼から見て正しい楽しむスポーツを日頃から提供していただけないものだろうか。あえてお願いする次第である。